

北崎豊二編著

『明治維新と被差別民』

今西 一

近年の地方財政破綻は、地域文化の著しい破壊を招いている。たとえば評者らがかわった、京都府『宮津市史』の編纂過程で作られた、みやづ歴史の館の宮津市歴史資料館は、昨年春から「休館」に追い込まれている。本書の研究会を組織した大阪の部落解放・人権研究所も、大阪府の財政危機から事業の存続さえ危ぶまれていると聞いている。評者らの研究を支えてくれた、地域の博物館・図書館・研究所などの危機は、日本の歴史学全体の危機と言っても過言ではない。先進国でいかに「新自由主義」が謳歌されても、日本のように教育・文化にかかる費用を、大幅に削減している国は、世界でも珍しいのである。

その苦しい研究事情のなかで、部落解放・人権研究所が、長年の共同研究の成果を、本書にまとめられた。本書の構成は、

次のようになっていた。

序論（北崎豊二）／第一章「維新変革期の被差別民における職業観の形成」（森田康夫）／第二章「畿内周辺における夙の賤視解除運動」（吉田栄治郎）／第三章「近世・近代移行期における兵庫津の諸賤民」（高木伸夫）／第四章「非人番制度の解体」（北崎豊二）／第五章「大和国における辛未戸籍の編成について」（井岡康時）／第六章「部落分村運動試論」（吉村智博）／第七章「幕末・維新期の博労・かわた博労・かわたの変遷についてのノート」（秋定嘉和）／第八章「明治初年の斃牛馬処理と屠畜業をめぐる動向」（本郷浩二）／第九章「文明開化と被差別部落」（里上龍平）／第一〇章「近世―近代部落史の連続面について」（上杉聡）

本書は、このように現在の部落史研究のなかでも最良のメンバーが集まり、えた身分を中心にするのではなく、非人・夙・髪結・三味聖・博労など、さまざまな「被差別身分」を究明した労作である。とりわけ斃牛馬処理などの実態については、新しい知見を加えている。ただ、与えられた紙数から全内容を紹介するのは不可能であり、

論点になる部分だけを紹介する。

簡単に要約すると、森田論文では、髪結・三味聖などの被差別民の職業観が、「解放令」後どのように変化するかを分析する。吉田論文では、畿内とその周辺の夙村の賤視解除の動きが紹介されている。高木論文でも、幕末維新期の兵庫津の算所村、夙村、ヒジリ、長吏などの諸賤民が分析されている。北崎論文では、摂津・河内両地域での非人番組織の「解放令」後の解体が、見事に検討されている。

井岡論文では、明治四年（一八七二）の大和の「辛未戸籍」が紹介される。吉村論文では、滋賀県の被差別部落の分村運動を、従来のように高く評価する議論に疑問を呈し、「旧慣」を内包した「旧身分秩序に基づく結合関係をより強化」したものと評価する（二六五頁）。秋定論文は、近世の皮多博労に注目し、近代の屠畜業への賤視の連続を問題にする。この近代屠畜業の兵庫県における展開を丁寧に紹介したのが本郷論文である。里上論文は、文明開化のなかで「礼儀」「品性」が、差別の論理になったことを指摘する。最後の上杉論文は、近世と近代の部落史を断絶する議論に対して、中世

からの連続性を説く議論を再論している。

最初に述べたように、本書は編者らが長年にわたって、実に豊富な新史料を発掘してきたことが、最大の魅力である。しかし、その具体的な内容は本書に直接当たってもらうしかない。ここでは、今後の課題を含めて若干の問題点を提起する。

まず本書の巻頭の森田論文が提起している「職業観」の問題である。これは本書の重要なテーマになっているが、一七世紀のヨーロッパでは、マックス・ウェーバーが言うように、「罪の意識からの離脱がプロテスタンティズムを媒介とした精神支援として存在」した、などとしているが、本当に言えるのだろうか（三五頁）。阿部謹也をはじめとする近年のヨーロッパ社会史の成果では、いかに差別が強かったかが実証されている。森田が尊敬するウェーバーや福沢諭吉の「禁欲」倫理こそが、「怠惰」な人間を差別する近代的な差別の源泉となっている。

確かに明治四年の斃牛馬勝手処理の問題は、各論者が問題にしているように重要な問題である。特に農村では、斃牛馬の処理権を放棄してでも、一般百姓に扱ってもら

いたいという要求が、皮多村などからださ
れている。しかし、これはいかに斃牛馬の処
理が、皮多村への賤視の理由であつたかを
物語っている。評者は、従来から「御百姓」
意識が、皮多村などへの優位の意識によつ
て成り立っていることを問題にすべきだと
提起している（『近代日本の差別と村落』雄
山閣、一九九三年）。近年流行の部落民の
「主体」論から、この皮多村の斃牛馬の処理
権の放棄が解けるのかは疑問である。

近世の斃牛馬処理権が、近代の屠畜・食
肉業にストレートにつながるものでないこ
とがわかるが、都市の場合、皮多が斃牛馬
処理の技術を生かし、屠畜や食肉業を展開
していることを、秋定・本郷論文は紹介し
ている。近年では朝鮮との交流も指摘され
ている。村落共同体の紐帯の強い農村から
離れた人びとが、屠畜・食肉業を営んでい
るのも興味深いし、都市と農村では、（穢
れ）意識に違いがあるのか、というのも考
えてみたい問題である。

北崎論文が明らかにした、非人制度の解
体過程も貴重な研究である。非人番制度の
解体の前提として、番人たちの「悪強請り」
があることも、興味深い事例である。しか

し、蛇足を加えれば、非人番を扶養してい
た村落の側が、「解放令」以降、どのように
変化していくのかが、次に解明してもらい
たい課題である。また共同体の扶養機能が
解体することによつて、乞食や賤民たちの
「物乞い」行為自体が、どのように賤視の変
化を生むのかという問題も、共同体の変化
とともに解明される必要がある。

最後に、上杉論文の拙論らへの国民国家
論批判について、一言反論しておきたい
（二七七頁）。今日、近世と近代の間に、ど
のような連続と非連続があるのか、具体的
な事例のなかで考えることが重要になつて
きている。評者が、部落差別は、近代国民
国家が創つた「差別」のひとつである、と
いったのは、身分的な賤民差別と、近代の部
落差別とを区別する必要を説いたのであつ
て、身分差別の研究を軽視するものではな
い。そのことは、『文明開化と差別』（吉川
弘文館、二〇〇一年）や『遊女の社会史』
（有志舎、二〇〇七年）など、評者の近年の
研究を見てもらえればわかるはずである。

（いまにし・はじめ 小樽商科大学商学部教授）
（A5判、二八四ページ、三三六〇円、解放出版
社、二〇〇七・九刊）